

原爆音楽の軌跡

第三期（1964～76）

この時期の話題は、何といてもポーランドの作曲家ペンデレツキが作曲した〈広島犠牲者への哀歌〉で始まる。作曲は1960年とされているが、1964年12月1日、当時の浜井広島市長にメッセージとともに同曲のレコードが献呈されたことから、一躍話題となった。早速東京から音楽評論家を呼び、広島市民にはレコード・コンサートの形で紹介されている。今日では、現代音楽の古典ともいえる作風だが、当時の前衛的手法を駆使した半ば冷ややかな響きは、聴く側にかかなりの戸惑いをもって迎えられたようだ。しかし、底流に潜む強烈な人間感情は概ね前向きに評価され、その後も原爆の脅威を象徴するヒロシマの作品として存在し続けている。

前の時期に開花したうたごえ運動はさらに盛り上がりを見せ、50年代の中頃から『うたごえ歌曲集』が相次いで現れてくるが、60年代に入ると、各地のうたごえ運動の中で原爆音楽が次々と作詞・作曲されるようになったことが特徴として挙げられる。65年には長崎うたごえセンターから〈原子野〉や組曲〈長崎〉が作られ、翌年には、東京うたごえによる作詞・作曲で〈広島から〉が発表されている。つまり、原水爆禁止運動の分裂にもかかわらず、新たな市民運動の広がりが高まりの中で、うたごえ運動と原爆音楽の創作活動が密接に結びついてきた時期といえる。

こうした流れの中で1974年、広島テレビが企画した「広島平和音楽祭」（古賀政男実行委員長）が、平和をテーマにしてスタートした。当初出演者をめぐるトラブルもあったが、音楽祭には音楽のすべてのジャンルを含む当時第一線で活躍する出演者たちが集合し、人間愛、希望、よろこび、友情、連帯、平和などを歌うとあって、その企画力に大きな注目が集まった。第一回には、ペギー葉山、美空ひばり、上條恒彦、友竹正則、観世栄夫らが出演し、団伊玖磨の指揮する広島交響楽団が共演した。美空ひばりが歌った〈一本の鉛筆〉はここで生まれるが、この曲は以来今日まで静かなブームを巻き起こしている。この「平和音楽祭」は毎年開催され、94年の第20回まで続く。このシリーズから多くの原爆音楽にかかわる新作が生まれたことは特筆すべきだろう。また、シリーズものとしては、地元の広島交響楽団が「平和の夕べ」と称して慰霊のコンサートを始めたのもこの時期である（68年、第1回）。

この時期の代表的作品として、芥川也寸志が大江健三郎の詩に作曲したオペラ《ヒロシマのオルフェ》（67年）、林光が原民喜の詩に作曲した《原爆小景》（三部作が完成しレコード化、73年）、森脇憲三作曲の組曲《ひろしま》（65年）、外山雄三作曲の交響曲《炎の歌》、森脇憲三作曲の男声合唱のためのレクイエム《碑》（70年）、早川正昭作曲の〈レクイエム・シャンティ〉（70年）などが挙げられる。オペラ《ヒロシマのオルフェ》はNHKテレビの委嘱作品で、60年の〈暗い鏡〉を改題改作したものである。被爆60周年にあたる2005年、広島出身の作曲家、細川俊夫が音楽監督を務め広島では初めて上演された。また、〈レクイエム・シャンティ〉は、歌詞を伴わない器楽曲であること、尺八という日本の伝統楽器を用いていること、などから海外でも大きな反響を呼び、今でも度々演奏される作品となっている。

この時期には、いくつかのシリーズものが企画され、多様な広がりが高まりの中、一定期間継続し、独自の展開をとげているのが注目される。

参考文献

- ・ 原爆被災資料広島研究会『原爆被災資料総目録』第二集 原爆被災資料広島研究会 1960年
- ・ 中国新聞社編『年表 ヒロシマ～核時代五十年の記録～』メディア開発局出版部 1995年
- ・ 『中国新聞項目別記事索引』昭和49年7月～平成10年7月 中国新聞社

(原田宏司・広島大学名誉教授)